

I・HEAP (Historical Justice and History Education)

15章 カナダにおける読書会(ブッククラブ)の和解の実践

担当：池尻良平 (東京大学)

著者

- ・ Jonathan Anuik
- ・ 経歴：カナダのアルバータ大学教育政策学部の准教授
(PhD は持っているが経歴の詳細が WEB では見当たらない)
- ・ 研究内容：
 - ブッククラブにおける草の根的な和解
 - カナダにおけるメティス教育 (※métis = カナダにおける混血の人々の総称)
 - 先住民族教育におけるアライシップ (※allyship = 「自分の属していない」社会的に不利な立場で虐げられている集団を理解・支援し、味方になること)
 - コミックが教育のテキストになりうるか
- ・ 主要な業績：



論文 Jonathan, A., Laura-Lee, K. (2014) Métis Student Self-identification in Ontario's K-12 Schools: Education Policy and Parents, Families, and Communities. *The Canadian Journal of Educational Administration and Policy*. (電子版のみ?)

<https://journalhosting.ucalgary.ca/index.php/cjeap/article/view/42860>

一般向けの書籍 ”First in Canada: An Aboriginal Book of Days”

■悩んだ訳語、定義について全体で共有した方が良いこと

- ・ book club | 読書会
- ・ Indian Residential Schools | 先住民寄宿学校
- ・ work of reconciliation on the grassroots | 草の根的な和解の実践

■議題

①p.334 の 1 行目で著者が重視している研究者が考えるべき課題について

Researchers need to ask how historical empathy as pedagogy may help guide neophyte teachers as they begin the work of reconciliation on the grassroots.

②日本の場合、歴史のフィクションの本として何を採用すると参加者の記憶を喚起するか

③著者が重視する、参加者にとって「安全な空間」を担保する際、

インフォーマルな読書会の他に何がありえるか。教室空間ではやはり難しいか。

■イントロダクション (pp.317-319) & 用語に関する注意 (pp.319-320)

・本章の関心

=読書会 (ブッククラブ) は、「過去について教員候補生(teacher candidate)に教える」という目標に対してどのように貢献するのか

- 図書館における和解のための日常的な出会いをどう持てるか
- この出会いは、和解の実践になりえるのか
- 本で描かれている先住民の現実と、カナダの教師が理解しないといけない和解の義務を、どう関連させることができるのか

・著者は知人との会話の中で、以下の本で読書会を主催した。

→著者と知人は先住民寄宿学校や、カナダの真実と和解委員会 (2015 年) のことを元々あまり知らなかったが、この読書会を通して草の根的な和解の実践の始まりを感じた。

⇒大学による公式化された取り組み

Richard Wagamese(2012) “*Indian Horse: A Novel*”

ソール=インディアン=ホースを主人公とする架空の物語。警察によって故郷の家族から離され、先住民寄宿学校に入れられる (カナダの先住民の子ども達にも実際あったこと)。彼は学校でホッケーの才能があることを発見する。Wagamese は、先住民のレンズでカナダの教育の歴史を分析するために、このソールのキャラクターを使っている。

・カナダの先住民を読み解く 3つの用語=The Standard, The Critical, The Indigenous

・1876年のインディアン法でカナダの先住民が定義され、1982年のカナダ憲法では、(1)インディアン、(2)メティス、(3)イヌイットの3つの先住民族を認めている。また、非ステータスのインディアン (先住民族と認識しているものの、インディアン法に基づく登録をしていない人) と先住民族の祖先を持つ人のカテゴリもある。

→インディアン法は、厳格なネイティブのカテゴリーを作り、結果として「他者」に分類する仕組みが多くの人を排除することになったという共通認識がされている。

→これらは先住民族による自身のアイデンティのコントロールを失わせる

■カナダにおける真実と和解 (pp.320-321)

・2008年から2015年まで「真実と和解委員会」が設置され、先住民寄宿学校の生存者の話を記録すること、文書記録を提供・共有すること、学校の遺産にどう対処するかを考えることが勧告された。

■教師教育における先住民族教育の…現状 (pp.321-323) & 振り返り (pp.323-324)

・教員候補生がカナダの先住民を学ぶ入口は、先住民寄宿学校の話である

→カナダ政府とキリスト教会の協力者が関与していた

→先住民の生徒を抑圧的な生活から解放された、成功した白人のモデルにしようとした

→教員候補生はヨーロッパ中心的・キリスト教主体のフレームワークで理解する

- 先住民も独自の識字体系や教育法も学ぶが、劣ったものという印象が残ってしまう
- 先住民のコンテンツは既存の知識形態に追加しているだけのもので (1,2 ユニット)、世界を見たり、理解したりするための方法ではないという印象を与えてしまう
- ・ 教員候補生が先住民の教育の話を学ぶことは、和解という活動の良いスタートになる
 - 「ストーリーテリングは、子ども達が自身の所属する社会の価値、教育、方法を学ぶことができる普遍的なコミュニケーション技法である」(Gardner, 1988)
 - ただし、教員候補生にとっては、カナダとはこういうものだという既存の理解とコンフリクトを起こす経験をするため、苦労しやすい
 - (逆に)本の「ページの間で平らにされた、ドライで歴史的でない荒野」(Wilson, 1998)のように捉えてしまうリスクもある
 - 学生(生徒)自身でストーリーを創造できるようになることが求められる
- ・ 読書会は、インフォーマルな場で先住民のストーリーを探求でき、既存の理解と結びつけられる場になりうると著者は考えている

■読書会アプローチ (pp.324-330)

- ・ 著者は「図書館」という機関の、読書会という活動に注目している
 - 「過去をどのように研究し、記憶し、利用するかを決定する機関は多い」(Seixas, 2006)
 - 共通の本を読むことによって、先住民の教育史のトピックを生成でき、自身の人生のストーリーと結びつけることができる
- ・ そこで、“Book of the Years”という試験的プロジェクトを 2014 年-2015 年に行った
 - 2014 年の春・夏に、アルバータ大学教育学部の教員達が本のリストを作成
 - 読みたい本の投票をし、“*Indian Horse: A Novel*”が選ばれた
 - 学部新入生向けの年次オリエンテーションで学長が宣伝
 - 約 2 週間おきに図書館の学習ラウンジで集まり、本について振り返る会
 - 申し込み不要で、事前に本を全部読む必要もなく、教員も学生も顔を出すだけで良い
- ・ 著者は「コミュニティ」というフレームをこのプロジェクトのコンセプトとして用いた
 - 1 冊の本を中心にした共同体を想定していた (実際は複数のグループが形成された)
 - 結果的に、これが草の根的な和解の役割を担っていたことに気づいた
- ・ 参加者の中には、ファースト・ネーションの女性をビジネスパートナーに持つ学生がいた
 - その女性の家族は実際に先住民寄宿学校に通っていた
 - その女性は、先住民寄宿学校の教育、実践、虐待が家族に与える影響も知っていた
- ・ 参加者の中には、ファースト・ネーションの女性 (博士課程の学生) もいた
 - 両親は敬虔なカトリック教徒だった
- ・ “*Indian Horse*”の一節 (ソールが先住民寄宿学校の生徒だった時代) を読んでいた際、その学校が彼に与えた影響について話し合っていた
 - 著者は寄宿学校に関する基本的な事実や、歴史的なポイントを話した

- ・著者は、学生達は現在から始まって過去へ、つまり自分の記憶の中で知っていることへと移動する傾向にあることを前提に、ファシリテートをしようと考えた

- ・ソールの人生を読みつつ、参加者の記憶から生まれたトピックが3つあった

①虐待

- 本では、神父による虐待があり、ソール以外の登場人物も経験していた

- 実際の学生から、実話として同じような話がされた

②宗教性もしくは信仰の実践

- 実際の学生から、虐待していた寄宿学校に教会（75%がカトリック）が関与していた

- のに、両親がカトリック教会に通っていたということが理解しがたいという話が出た

- その学生は、両親の信仰の問題ではなく、教会の力の問題であると考えた

③ホッケー

- カナダのメディアでは「ホッケーは人々を1つにする」と婉曲的に主張している

- ソールのホッケーの話を実際に学生が集めて議論すると、氷の上の話と、

- 「氷の外」の話があることに気づき、試合後のチームがレストランに行った際、

- 地元の人たちが、彼らを部外者として人種差別しているシーンで議論を深めた

- 以前学生だった祖父の「このみんなは、少しネイティブ」という発言を共有し、

- 混血の多いカナダ北部の住民にとって、先住民を人種差別する構造の複雑さを話した

- ・読書会の参加者全員が、“*Indian Horse*”を読んだ結果思い出したエピソードを語った

- その記憶の意味を理解し、その記憶や経験を知識として捉えられるようになる

■ディスカッション (pp.330-332)

- ・教員候補生は先住民族のことを学んでいるが、効果的な授業に仕立てる自信がない

- 自分の解釈が間違っているのではないかという学生の不安を取り除くことが大事

- ・読書会は、内容の理解度を評価する目的はないため、安全な空間になっている

- 学生が自分の話を共有し、読んだり聞いたりしたことを自分の基準に合わせることで、

- 知っていることや学んだことを含む、一貫した語りを展開し始められるようになる

- 著者がやったことは、教員候補生が先住民について知っていることを調べ、

- Wagamese (2012) のカナダの教育史における先住民の視点と関連づけること

- トラウマは存在するものの、物語には希望があるし、レジリエンスもある

- ソールのような生徒の歴史を教える際、フィクションを利用することができる

■結論 (pp.332-334)

- ・真実と和解委員会 (2015) は、教育者に対し、先住民寄宿学校について教えるだけでなく、現代のカナダの学校におけるその歴史の影響を理解することも求めている。

- ・読書会のアプローチは、和解の実現に向けた制度的な実践に対し、人間らしく理解するための草の根的な出会いとして補完するものになる

- 研究者が取り組むべき問いとして、歴史的エンパシーが草の根的な和解の活動を始める（ことが求められている）新米教師の指導にどう役立つかがある
 - 歴史的エンパシーでは、歴史的な出来事が起こる際の文脈を考慮することを重視する
 - 歴史的エンパシーから今回の実践を検討したところ、2つの課題が明らかになった
 - 1) 初等中等教育の社会科の学習成果に焦点を当てた文献が多い
 - 2) 学習者個々人の応答に焦点を当てたデータを扱う報告が多い
 - ⇒ ‘a community of inquirers’ でどう実践されているかも研究すべき
- インフォーマルな学習空間で、ノンフィクションではなくフィクションのテキストを扱う読書会が、どのような教育的な価値を持つかを考えることが今後必要になる